

■展覧会案内

遮光器土偶は何に使われたのかー第68回企画展「遮光器土偶の世界」

会期：平成29年6月3日（土）～平成29年8月20日（日） 会場：特別展示室

岩手県は土偶出土数が日本一で（6,500点以上）、遮光器土偶も7割近くが岩手県から出土しています（表1-1）。

「土偶」は、粘土で作られた人形の意味ですが、日本で土偶と言えば、縄文時代に作られた人形を指し、古墳時代に作られた人物埴輪などは区別されます。しかし、「土偶」自体は、他の国や時代にもあるので、これらと区別し縄文時代に作られたことを強調するために、近年では「縄文土偶」と呼ばれたりもします。縄文土偶は、農耕文化の伝来とともに変容し消滅しますが、東北地方では弥生時代まで残ります。東北地方では水田耕作をしていても農耕文化ではなかったのかもしれません。

さて、当館で日ごろ展示している遮光器土偶も、老若男女問わず人気があります。そこで、今回の企画展では、遮光器土偶にスポットライトを当てて様々な角度から検討し、最大のテーマである用途解明に迫りました。

■縄文土偶のある場所

縄文土偶は、土器のように、縄文時代のいつでも、どこにでも見られるわけはありません。日本一土偶の多い岩手県

も、縄文時代前半までは、むしろ比較的小さい地域でした。

東京大学名誉教授の今村啓爾氏は、「土偶の分布について興味深いのは、九州、関東の早期、前期の東北から南下して中期の関東と中部、後期の南九州と、いずれも植物質資料を基盤とした繁栄が目立つ地域と時期にみられること」だとし、さらに「縄文の繁栄を支えたのは基本的に植物食であり、その多少が人口を変化させる最大の要因であった」と述べています。そうすると、植物資源の豊かさ（人口増）と土偶に相関性があるということになります。

なぜ繁栄する時期・地域が変化するかといえば、気温（気候）が変化するからで、その植物にふさわしい気温の地域が時期によって変わるからでしょう。縄文時代の始まりは寒く、その後、前半は今より暖かく、終わり頃は大体今と同じでした。

土偶の量が植物の採集加工に使う石器の量と比例するという現象は、日本一土偶の多い青森県三内丸山遺跡でも、二番目に多い山梨県釈迦堂遺跡でも確認されています。遮光器土偶の出土も、内陸に

光器土偶も、立体的なのは頭だけで、背中はやはり平らです（写真1-2）。こうなると、やはり平らなものには理由があると思わざるを得ません。

まず思い浮かぶのは、壁に据え付けることです。縄文土偶には、頭、腕の付け

写真1-1



写真1-2



写真1-3



写真1 岩手県岩手町豊岡遺跡の遮光器土偶

表1-1 東北地方の遮光器系列土偶

	大遮	大遮？	大遮系統 大遮出	大遮系統？ 大遮出？	小遮	小遮？	小遮系統	小遮系統？	県別合計
青森県	81	45	32	30	61	66	12	9	336
岩手県	174	144	235	241	221	97	4	22	1,138
秋田県	60	41	35	22	42	24	0	10	234
宮城県	8	1	23	16	9	2	0	6	65
山形県	0	0	21	10	0	2	0	0	33
福島県	0	0	3	3	0	0	0	0	6
計	323	231	349	322	333	191	16	47	
合計1		554		671		524		63	
合計2				1,225				587	
総計								1,812	

表1-2 岩手県の遮光器系列土偶

	大遮	大遮？	大遮系統 大遮出	大遮系統？ 大遮出？	小遮	小遮？	小遮系統	小遮系統？	地域別合計
奥羽山脈	2	2	0	0	5	1	0	0	10
沿岸	28	13	14	17	4	2	0	1	79
その他	144	129	221	224	212	94	4	21	1,049
計	174	144	235	241	221	97	4	22	
合計1		318		476		318		26	
合計2				794				344	
総計								1,138	

偏り、険しい奥羽山系や沿岸部に少ないことから（表1-2）、やはり植物質食料との関連が窺われます。

■縄文土偶は平らで、立てない

ところで、縄文土偶の大きな特徴は、大きな介添えなしに立たせることができない点です。基本的に板状に作られていて背面が平らなためです。大型の遮

根、胸に一对の貫通孔^{かんつうこう}を持つものがあり（写真2）、こうした用途にふさわしいです。立てたり吊り下げたりするのに使ったという研究者もいますが、大きな荷重^{かしじゅう}に耐えられるような大きさの穴ではなく、何より、立てるのなら、縄文人の技術力ならば最初から立つように作るのではないかと思われます。そして、立てるのなら背面が平らである必要はありません。

■大型遮光器土偶の後頭部の摩滅痕^{まめつこん}

壁に据え付けるのも、大型遮光器土偶の場合はふさわしくありません。後頭部が著しく出っ張っているからです。そして、良く観察してみると、大型遮光器土偶の突出した後頭部には、しばしばひどい摩滅痕^{まめつこん}が見られます（写真1-3）。コンクリートで擦ったような摩滅痕は、何かに据え付けて激しく動かされたことによって生じたと推測され、縄文人の行動様式で理解すれば、“何かに固定して持ち歩いた”用途が浮かびます。

■土偶の用途を考える

確かに、土偶は「植物質資料を基盤とした繁栄が目立つ地域と時期にみられる」ようです。植物資源の豊かさを繁栄につなげるには、それを採集・加工することが不可欠で、それを担うのは、定説

では女性です。そうすると、美味な“肉の獲得”に対する要求は変わらず、男性には狩猟活動が求められ続けたと思われる。おそらく“女子ども”だけで、それまでより長く集落から離れて森の中に入って活動しなければならなくなり、危険な目に合う機会も増したことでしょう。そのため、女性の中にお守りを必要とする者が現れ、それが土偶の出現だと推測します。初期の土偶が立体的なのは、小さいので携帯に支障がなかったためであり、大型化するにつれ運搬^{うんぱん}するための工夫（板状、据え付け）が必要になったということではないでしょうか。

■壊れても捨てられない

とは言っても、土偶は掌^{てのひら}に収まる大きさが主流です。手に持って扱い、持ち歩くなら、壊れる機会は非常に多くなります。しかし、持ち歩くなら愛着が強く湧き、壊れても、簡単には捨てられないし、用途に関わるわけでもないのですぐには取り替える必要もありません。逆に、気に入らなくて愛着が生まれなければ壊れていなくても取り替えることもあるでしょう。こうして想定される残存状況は、実態に合っていると思います。

■多様な土偶の理由

なぜ土偶は携帯に不便なほど大型化したのでしょうか。それは、小さいと森の中でなくしやすく、またその効き目に対する期待の大きさの表れと考えます。

大型化するといっても多くの土偶は300g未満で、ペットボトルより軽く、500gあっても出現期のiPadより軽いのです。さすがに、大型遮光器土偶は1kg以上あり片手で持つのは無理ですが、赤ん坊を抱くように両手で持てば十分軽く、大型遮光器土偶が空洞化するのは軽量化のためであった可能性もあります。大型遮光器土偶だけ別の用途だった可能

性も十分にありますが、形や発見される場所など多くの特徴が縄文土偶の伝統そのままなので、別だとするのは不自然です。

さらに、出産土偶やおんぶ、抱っこをする土偶が現れるのは、携帯し続ける中で愛着が生まれ、森の中でのお守りから、安産祈願など個人の守護神にまで用途が広がっていったためと考えられます。これらを本来の土偶と全く別物とするのは、かなりの程度デザインを共有しているので無理があります。ポーズを取らない土偶が主流であり続けるのは、幼児の“お人形さん”と同じで、特化したポーズを採らない方がその時々でいろいろな役割を見立てられるからではないでしょうか。

■女性が所有する女性像

土偶の所有者が女性であることは、出土場所からも示唆^{しさ}されます。基本的には集落の範囲内あるいはそれに近い活動の範囲内から出土します。生態人類学者、渡辺仁氏は、これを近位ゾーンと呼び、主として女性と子供の活動領域としました。遠位ゾーンは男性の活動領域で、例えば八幡平^{はちまんたい}のような高い山の上からは、土器片や矢じり、石棒の仲間出土しても、土偶は発見されません。さらに、土偶は、家の中や集落の中だけでなく、その周辺からも出土していることから、近位ゾーンでの活動に伴った可能性があり、土偶を持ち歩く証拠とみなせるかもしれません。

（主任専門学芸員・金子昭彦）

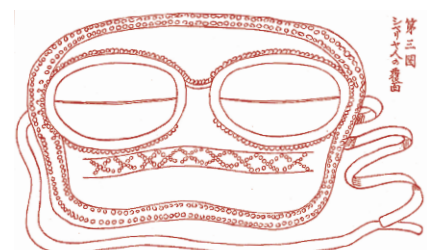


写真2 岩手県紫波町西田遺跡の土偶